

平成 27 年度第 3 回 鱒ヶ崎三本松古墳調査指導委員会会議録

1 開催日時

平成 28 年 3 月 13 日(日)午後 1 時 30 分～ 3 時 30 分

2 場 所

鱒ヶ崎三本松古墳・流山市西平井倉庫

3 議 題

- (1) 鱒ヶ崎三本松古墳の調査状況
- (2) 古塚碑の保存処理状況

4 出席委員

下津谷委員、滝沢委員、渡辺委員、
松井委員、古谷委員

5 事務局員

小栗館長、北澤主任学芸員

7 会議内容

事務局から第 2 回会議以降の古墳の調査経過及び石碑の保存処理について、配布資料にもとに説明を行い、各委員からの質問や確認事項、指摘事項についての意見交換を行った。

(1) 古墳の調査経過及び調査方針についての意見・指摘事項
<埴輪について報告事項> (北澤主任学芸員)

第 2 回会議以降、メール等で調査状況について報告を行ってきたところではありますが、これまでの経過について説明いたします。

今日、用意した埴輪は、11 月 28 日に開催した現地説明及び 12 月 19 日に開催した知の講座で展示したものとその後に出土したものです。1 月 30 日(日)には、松戸市立博物館で埴輪研究会の例会が行われ、これら出土した埴輪を研究会の皆様に見せていただき、コ

メントも頂いています。当日は、古谷委員も参加されていますので、後程コメントを頂きます。

最近出土したものでは、前方部と後円部の境目あたりから完形に近い円筒埴輪が発見されています。3条4段の円筒で、1段目は低くなっており、下総型直前のものと思っています。前方部（旧参道）の南側では埴輪がまとまって出土しています。これらの纏まりは、埴輪のみでなく、中世後期の常滑片や土器すり鉢などが一緒に見つかっており、人為的に破棄されたものと思っています。先ほどの円筒埴輪も含めて原位置にあったものは、確認できませんでした。

< 確認事項及び意見・指摘事項 >

- ・ 1月30日の埴輪研究会での三本松古墳の埴輪についてのコメント

（古谷委員から）

下総型埴輪の出現前段階、6世紀後半に位置付けられる。

他の会員からも同意見であった。

最近出土した3条4段の円筒も下総型直前でよいと思う。

（北澤主任学芸員）

指の造作は、下総型には見られないものであるが、他地域の可能性はあるのか。

（古谷委員）

下総型の仲間でよいと思う。

（北澤主任学芸員）

手賀沼周辺ではこのタイプは存在するのか。

（渡辺委員）

三本松とほぼ同時期の原1号墳では人物埴輪も出土しているが、このタイプは出土していない。

（古谷委員）

資料にある馬の埴輪の足は、前に出土した馬形埴輪と比べると小さい感じがしており、別個体だと思われる。

<古墳調査報告事項>

第2回会議以降、下津谷委員・滝沢委員・渡辺委員には何度も視察に来ていただいておりますが、確認を踏まえて、第2回会議以降の調査経過について報告します。

周溝に関しては、ご覧のとおり非常に浅いものとなっており、くびれ部から前方部に向かう途中で立ち上がってなくなっています。前方部は、1月の経過報告でも書いてありますが、中世・近世の遺構により削平されて確認することはできません。

墳丘裾には、細い溝が巡っていますが、前方部先端で向きを変えていることが明らかとなっています。溝内から出土した遺物から後世の人々によって古墳との境界として築かれたものと考えています。

現在、墳丘表土をほぼ除去した状態となっていますが、墳頂部では埋葬施設は確認できていません。また、中世以降の柱穴らしきものも見られることができ、今後の調査方法につきましてはご助言いただけたら幸いです。

何本か入れたトレンチの状況から、かなり高い面でローム及び旧表土である黒色土層が確認できます。このことから墳頂部だけでなく、墳丘裾も大きく改変を受けていることが考えられる状況です。

<意見・指摘事項>

- ・周溝と墳丘の離れ具合からやはり削平されている可能性が高いと思う。
- ・墳丘裾の溝は幅が細く、古墳に関わる可能性は低い。
- ・前方部のスロープはお稲荷さまの参道として削られた可能性がある。本来はもっと高かったのではないか。
- ・表土剥ぎは終わっており、次の段階に進むべきである。
- ・これまで墳頂部は面的に掘り下げていたが、埋葬施設も確認できていない。このまま掘り下げるよりも、旧表土までトレンチで掘り下げ、墳丘の構築状況を確認したうえで、掘り下げていった方が良い。
- ・トレンチで掘り下げる場合には、埋葬施設や築造過程における祭祀跡などが発見されることもあるので慎重に進めていって欲しい。
- ・墳丘の構築については、青木敬氏の論文が参考になると思うので、

調べておいておく必要がある。

これらの指摘事項を踏まえて、墳丘の主軸及び直交するトレンチ部分から旧表土まで掘り下げを進めて古墳の構築状況を確認していくと共に埋葬施設の存在を調べていくこととした。

< 石碑調査報告 >

前回の会議後、石碑表面の硬度測定を行っている。1月に入り、石碑を反転させ、裏面のクリーニング、洗浄、保存処理を実施した。

2月2日には裏面の硬度測定を行った。

次年度は復元を含めた3D実測を実施する予定である。

< 意見・指摘事項 >

- ・石全体の硬度に関しては大きな問題はない。
- ・弱い剥離した場所の対応が問題である。外に置く場合には当然補修が必要である。
- ・基部がない中でどのように設置するかが問題である。基部にソケットかます案があるがどのようになるのか、類例があるのかを調べなければならない。
- ・基部がないものの展示では、東京国立博物館で展示をしている石幢がある。これは、基部にソケットをかまし、上段にも石を支えるものをはめ込み、壁とつないで安定させている。古塚碑もこれでいけるのではないか。
- ・古塚の碑を現地で復元させる場合には、管理の面からも覆屋は必要不可欠である。基部にソケット覆屋に支えをつなげば展示が可能な気がする。東京国立博物館の展示を参考として、実施可能かどうか確認してもらいたい。

次年度も指導委員会を継続して実施する予定です。